



新収作品:           New Acquisition:  
フセーベ・デ・リベーラ   Jusepe de Ribera  
《哲学者クラテース》   *Philosopher Crates*

## 昭和63～平成元年度の新収作品について

### On the New Acquisitions in 1988-89

本年度の購入作品は絵画3点、素描1点、版画6件101点、また寄贈には彫刻、素描、書籍各1点と版画3件33点がある。作家はデューラー、リベラ、ティエポロ、クロード・ヴェルネ、フラゴナール、ピラネージ、ブレイク、ロダン等々から、オーストラリアやドイツで活動中の現代作家たちをも含めて37名の多きに上り、結果として大層ヴェラエティに富んだ異色ある年度となった。

絵画。先ずリベラの《哲学者クラテースの肖像》は、画家が1636年にリヒテンシュタイン公家の発註によって制作した6点の哲学者像中の1点で、本図の他に3点の姉妹作が英米の美術館に所蔵され、また公家の蔵品目録によって6人の哲学者とはアリストテレス、プラトン、アナクサゴラス、ディオゲネス、プロタゴラスそして本図のクラテースであることが分る。発註は元来12点であったというのがその中の6点のみが制作された。高さ1.25メートル、幅も1メートルを越える連作が並んだところは壯観であったろう。各図は特定の聖賢たちの肖像という体裁をとるが、古代の彫像等に依拠することなくモデルには画家の同時代人を用い、著作を画中に描き込む等の趣向により人物を同定させようとしている。しかし例えば本図においてこれがターバイの哲学者クラテースであると分る物証は銘文以外に何も無い。従って観者はこれを一箇の中年男子の肖像としてみればよい。

画家リベラはベラスケスと全くの同時代人で17世紀のスペイン絵画界の巨匠であるが、早くにイタリアへ赴きナポリに定住し、カラヴァッジオの強い影響下にリアリストとして名声を馳せた。当館はスペイン絵画にムリーリョの佳作《聖フスタと聖ルフィーナ》を所蔵するが、本図はむしろ近年(1987年)の購入作品であるファン・ダイクの《レガネース伯の肖像》と対比さるべきものであり、相俟って当館蔵品中のバロック絵画の充実に資するかと思う。

次にジョヴァンニ・パッティスタ・ティエポロの《ヴィーナスによって天上へ導かれるヴェットール・ピサーニ提督》は1743年、画家47歳のころ、即ちすでに多くの教会堂や邸宅の壁面装飾画によって名声大いに上り、やがてヴェルツブルク司教館やマドリッド王宮等国外での大仕事へと発展して行く壮年期の一作で、ヴェネツィアの貴族ピサーニ家の邸館大広間の天井画のためのオイル・スケッチである。

完成作と構図に若干の相違があるのはこの種の習作の常であり、殊にその変化の明瞭に認められる飛行する<sup>フットー</sup>天童とユピテルの鷲に関し素描が存在することは制作課程を知りうる点でも興味深い。当館は昨年度画家の息子ドメニコ・ティエポロの祭壇画《聖母子と三聖

人》を購入しており、18世紀ヴェネツィア画界を代表する大画家父子の作品を相次いで収蔵することを得たのは悦ばしい。

購入絵画の第3点はクロード・ジョゼフ・ヴェルネの《夏の夕べ、イタリア風景》で、20歳でローマへ行き、39歳で帰国し、75歳で死去した画家の59歳の年(1773)の作品である。ブッサンやクロード・ロランの、「英雄的風景画」の時代は疾くに去ったが、バルビゾン派や外光・印象派はもちろん、ロマン派へもまだかなりの時間を残した18世紀フランス風景画界の代表者の一人である。画風は同じくイタリアに画材を選んだ後輩ユベール・ロベールとは対照的であった。そのことは当館蔵のロベールの《ローマのファンタジー》(1786年)と比較すれば瞭かである。

本図は往年のイタリア体験を回想した古典的風景に夕方という時間的情緒を加味したものの。光の扱い方を変えれば暁方ともなろう。また背景の町の描写には新古典主義的な香りを感じさせるものがある。

素描と版画。素描のフラゴナール、版画のデューラーとピラネージは何れもすでに当館が所蔵する各作家の作品の充実を計るという観点より購入が行なわれた。即ちフラゴナールの素描《王子マンドリカルド》は1980年度の購入作品《若い熊使い》よりも約20年後の作とされ、躍動するチョークの描線はアリオストの叙事詩『狂乱のオルランド』の一場面を描き得て妙を尽し、《熊使い》とはまた別趣の様式を示すものである。当館ではピラネージの版画はこれまでに《牢獄》シリーズの初版と再版を入手していたが、今回はローマのヴェドゥーテ(都市景観図)作家として名声の高かったこの人の代表作《ローマの景観》全60点を加えていよいよ充実を計ることができた。版画の大宗デューラーの作品は価格の高いこともあって当館ではまだ手薄であるが、今般の《銅版受難伝》は版画家デューラーの最円熟期の傑作であって、神聖厳肅なるキリスト受難伝を描きつつもさまざまなモチーフや技法を駆使して観るものを愉ませる配慮を忘れてはいない。本シリーズは大いに流布しイタリアではアンドレア・デル・サルト、またヤーコポ・ダ・ポントルモ等もここからモチーフを得て各自の作品中に応用している。数あるデューラー版画中本作は同期の木版画《小受難伝》とともに、作者の心の余裕を感じさせる点において特筆すべき意義をもっている。

他方ブレイクの版画集《ヨブ記》は、来(1990)年度に予定する当館でのブレイク展を控えて、その代表作を入手したいとする意図より出た購入である。受難伝あるいは黙示録等々の聖書の物語を版画集として刊行すること、また技法が銅版画であることにおいて本作品は、上記デューラーの受難伝の300年後の弟妹であるとも言える。そしてともに中世の装飾写本の伝統につながるのであるが、中世色はむしろブレイクの方に強いかも知れない。もとよりここで両者の比較を行なう心算はないが、ルネッサンス人デューラーにおいては全体として統合されていた各様の要素が分離し、その一つが近代人ブレイクに顕現したと言えないであろうか。ともかく両者の対比は相互に他を理解する上で頗る示唆するところ

の多い偶然の同時購入となった。

寄贈作品6件は次の各方面の御厚志による。即ちロダンの彫刻は当館協力会、ミレーの素描はパリのプルテ商会、版画のうちオーストラリア建国200年記念版画集は世界の20カ国のそれぞれ代表的な美術館へ寄贈がなされたもので、わが国では特に当館が選ばれた。またツァインダーの版画はライプツィヒ美術館から、さらにブレイクの《チョーサーのカタペリーへの巡礼》は画廊アルカディアから、また同じく書籍《夜想》は当美術館協力会からそれぞれ寄贈していただいたものである。

以上寄贈者の芳名を記しここに深甚なる謝意を表する次第である。

以上が今年度の新収作品の概要である。私は平成2年3月末をもって当館を退任するのでこれが在職10年間の最後の購入となった。私の購入方針については別刊の『新収蔵絵画目録 1979-1989』(平成元年)に記したが、

(1)松方コレクションの主体を形成する19世紀後半から20世紀初頭のフランスを主とする美術(印象派等)の充実

(2)それを底辺として15世紀にまで溯る西洋近世の美術の収集

(3)版画の系統的収集

の3つである。その結果版画に関しては上記の目録記載の約30点を取得した。このうち(1)に属するものはボナール、ブーダン、ドニ、マネ、モネ、ピサロ、ロセッティ、シニャック、シスレー等、また(2)に関してはバウツ、ドーミエ、ダウ、ヴァン・ダイク、フェースリ、リベール、ロイスダール、セーヘルス/スフート、テルブリュッヘン、ティエポロ父子、ヴェルネ等があり、数においては(1)を上廻った。これは予算の制約に基づくところ多く、外光派、印象派、後期印象派はもとよりフォーヴィスムや表現主義等の作品も、価格の故にそれらの購入を見送らざるを得ない場合がしばしばであった。その点松方家御遺族の厚志によるマネやピサロの優品の寄贈は大きな喜びであり、またボナール、ブーダン、ドニ、マネ、モネ、シニャック等々の購入も現行の予算を以てしてはすでに不可能かと思われる。

このような事情が結果的には(2)と(3)の範疇に属する作品の取得を促すこととなった。殊に(3)の版画はここ10年間に飛躍的に増大し、それのみをもって小規模の展示をも行なえるまでに至った。しかし版画の数は余りにも茫大であり、また同じ作品にもステートの差違があつて、良質の刷りの価格の昂騰は近年頃に著しい。このため版画の取得にもかなりの予算額を当てなくてはならない。しかも紙という素材の性質から常陳は難しく、当館の収集上絵画と版画との均衡よろしきを得るのは極めて難しい状況に在る。しかしともかくも

マンテーニャ等初期のイタリア銅版画から、デューラー、レンブラント、カロ、ピラネージ、ブレイク、ゴヤ、クリンガー、さらにはピカソ等々の西洋美術史上の巨匠の版画をある程度集めることを得て、この分野に今後への緒口が付けられたかと思う。

わが国における、西洋美術のための唯一の国立美術館としての当館にとって、(2)の古画部門の充実が望ましいのは言うまでもない。当館を訪れて西洋美術史の系統的な流れを実物に即し理解しようとすれば、それは何にもまして当館設立の意義に相応しいことと言わなくてはならない。しかし古画の鑑識には多大の困難が伴い、作家を確実に同定しがたい場合も寡くない。また後世の補筆や修復を識別するためには特殊な訓練が求められ、さらにレントゲン線や紫外線撮影等の光学機器の活用も不可欠となる。これはまた館蔵品の保存とも密接に関連し、この分野の強化を計ることが今後当館の喫緊事であろう。しかしながら科学的検査は畢竟鑑識のための有用なる一手段であるに過ぎない。それによって得られた資料を判断するのは人である。あるいはその人の脳中に形成された作家像である。マクス・フリードレンダーが次のようなことを言っている。同じところに音程の違った音叉を沢山立てておき、そこである音を出すとそれに合った音叉だけが振動して鳴り出す。これは作品鑑定過程を表現するのに丁度良い比喻になる。鑑識家は、脳中の作家像を純粹に調律しておかなければならない。そうすれば作品とのコンタクトは一瞬にして成立し、初見をもって判断が下されるのである。第一印象は最も重大な意義を有するものである。この二度と起こらない体験を尊重し、作品から発する信号をできるだけ純粹に受け容れなければならぬ。そこに少しでも分析や思索が混じるとその効果の一部は減殺されてしまう。作品に近接して素地、罅割れ、補筆、銘文、風俗、建築等々の研究も大切であるが、しかしそれらの科学的分析は全体の印象を破壊し造形的人格の表現を困乱させるものであることをよく銘記すべきである。印象は連続反覆されると稀薄化しその結果眼が鈍ってくる、と言ったような論旨である。もう70年余り昔の言説であるから今さら何を陳腐なと思う向きもあろう。しかし終生美術人に徹した達人の言には傾聴すべきものがある。眼の修練に自信がなければとてもこうは言えたものでない。10年に亘る当館在任を顧みて私は心中恐慄忸怩たるものを覚える。幸いにしてもし大過なかつたとすればそれは館員諸氏の輔佐よろしきを得たためであった。終りに再びフリードレンダーの言葉を引いておく。「患者の誤診は大抵患者が予期に反して死ぬか生きるかするので分る。設計違いの橋なら落ちるだろう。しかし見損われた絵は死にしなければ落ちもしない」。つまりそれが館長の墓標だと言うわけである。

購入予算の規模の増枠やまた単年度制の撤廃などが当面望み得ないとすれば、当館の収集はどうしても版画等に重点を置かざるを得ない。すでに国内に在る名品の寄贈や寄託を受ける道を拡げることが望ましいのは申すまでもないが、今世紀初頭頃までの絵画の収集は世界的に見てもすでに落穂拾いの観があることを思うと、他の国立三館との協議を重ね

て現代美術作品の取得にも道を開くことを考えなければならないのではあるまいか。

このように当面する問題はさまざまあるが、それらは決して解決不可能ではなく、私はわが国立西洋美術館の常に新たなる進展を願いまた信じて止まないものである。

前国立西洋美術館館長 前川誠郎